ショスタコーヴィチは語り続ける。

今度の定期は 12 月 8 日(日)、びわ湖ホールです。

第 110 回定期演奏会に向けて。

記念すべき 110 回定期の客演指揮は立響定期初登場の石坂宏氏。　新国立劇場ほかオペラを中心に幅広く活されている指揮者です。師走の日曜日、立響ファンの皆さま、そしてご家族、どうぞお誘い合わせの上、びわ湖ホールへお出かけください。

立命館大学交響楽団第 110 回定期演奏会

日時：2013 年 12 月 8 日（日）開場　15:30　開演　16:30
会場：びわ湖ホール　大ホール
指揮：石坂　宏（客演）　　藤本　直也（学生）
曲目：ベートーベン　序曲『エグモント』
ボロディン　歌劇『イーゴリ公』よりダッタン人の踊り
ショスタコーヴィチ　交響曲第 5 番ニ短調　Op47

■演奏曲誌上プレビュー１

エグモントとは何を指す言葉がご存じだろうか。19 世紀の初め、ウィーンにてベートーベンのもとにある依頼が舞い込んだ。時の文豪ゲーテの戯曲に音楽を付け、一種のオペラのようにしたいので作曲をお願いしたいというものであった。いわばゲーテとの共作、コラボレーションだ。その戯曲が『エグモント』であった。この作

16 世紀頃、今のオランダからベルギーにかける地域は、フランドルと呼ばれており、エフモントはフランドルの伯（はく）、つまりは領主であった。その時まだオランダという国はなく、当時強大な力を持っていたスペインの支配下にフランドル及びネーデルラント地方は属していた。彼は優秀な騎士としてスペインに従軍し、数々の手柄を立て、フランドルの知事に指名される。また、並行してヨーロッパ各地には宗教改革がもたらされ、それまでのキリスト教とは一線を画した新勢力が台頭、動乱の時代でもあった。エフモントは新勢力のカルヴァン派民衆からの支持を受け、オランダ独立のために立ち上がり、奮戦・検討するが、裁判にて有罪の判決を受け、斬首刑に処されてしまう。だが、彼の魂は受け継がれ、オランダは 1581 年にスペインからの統治権を拒否し、更には 1648 年に独立を国際的に承認されるに至った。エフモントは言うなればオランダ建国の立役者なのである。

まず冒頭、F 音のみの合奏から始まる序奏。これは民衆の叫び、苦しみ、憤りを表す。間に挟まれる木管楽器の掛け合いは、旋律に上手く不安を織り交ぜながら、毅然と立ち向かう勇気を音楽にしていると言えよう。

第 2 部の 3/4 拍子の Allegro 以降は、同じモチーフの展開が何度も繰り返され、エグモントと民衆の強い信念が浮き彫りになる。そしてヴァイオリンのみによる斬首の描写の後、木管によるコラール、すなわち「神様の声」を経て、金管楽器よるファンファーレ・勝利の歌へとつながり、締めくくられる。

（文責　藤本　直也）

立響楽信 37

2013. 11

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学交響楽団　ruso_info@yahoo. co. jp

■演奏曲誌上プレビュー２

だったん人（ボーロヴェツ人）の踊（原題：Половецкая пляска с хором）とはアレクサンドル・ボロディンらによって作曲された歌劇『イーゴリ公』の中の第二幕で使われる曲である。歌劇の中では合唱付きで演奏される。

1185 年代のこと、ロシアの東北はるかシベリアの草原地帯に住むボロヴェッツ族が、イーゴリ公の住む町へ侵攻してくる、という話を聞いた主人公のイーゴリが、妻ヤロスラーヴナの反対を押し切って軍隊を出陣させる。だが悪い兆候である日食がその運命を示していたかのごとく、イーゴリとその息子ヴラディーミルは敵軍に捕えられてしまう。捕えられ、いつ殺されるのだろうと考えていたイーゴリ達だが、敵の王であるコンチャーク・ハン（王）はイーゴリたちを厚遇する。そしてある晩コンチャーク・ハン」はイーゴリに仲間にならないかと提案する。だがイーゴリは厚遇してもらったことを感謝しつつも、祖国のために誘いを断固拒否する。その男気に惚れたコンチャーク・ハンは宴の準備をととのえ、奴隷たちの踊りを披露しイーゴリたちを歓迎する。このシーンに使われているのが今回演奏する“だったん人の踊り”である。この後、故郷でボーロヴェツ族の侵略が酷いということを聞いたイーゴリは敵の目を盗んで協力者とともに脱走することとなる。一方コンチャーク・ハンの娘と恋仲になったイーゴリの息子であるヴラディーミルは、父親の脱走の罪を問われていた。だがコンチャーク・ハンの提案により、罰を受ける代わりにイーゴリの住む町への遠征の兵士となることを命令される。そして歌劇はイーゴリが町に戻ってきた場面で幕を閉じる……といった内容である。ここまで読んであれ？と疑問に思った方も多いのではないか。それもそのはず、これからイーゴリは町を取り戻せたのか、ヴラディーミルはどうなったのか、物語の一番気になるところが描かれていないのである。ではなぜここで終わってしまったのか。諸説あるが、実はこの作品を書いている際にボロディン自身が亡くなってしまっていたことが原因ではないかとされている。（冒頭でボロディンらが作曲と書いたのはそのためである。）この歌劇は、ボロディンが亡くなる直前まで書いていた曲をリムスキー＝コルサコフとグラズノフの手によって完成させたものである。なので、もしボロディンが生前に完成させることが出来たならば、物語の全貌が明らかになっていたかもしれない、と一説では言われている。

そんな歌劇『イーゴリ公』よりの“だったん人の踊り”であるが、上記で述べたように、老若男女様々な奴隷たちが故郷を懐かしみ、王を称える歌や舞を宴の中で披露している場面で使われている曲である。中世ユーラシア大陸の荒々しくも美しい旋律を感じ取っていただければ幸いです。

（文責　竹下　裕也）

■演奏曲誌上プレビュー３

ショスタコーヴィチ（1906～1975）は生涯に 15 曲の交響曲を作曲した。37 年に作曲された 5 番はショスタコーヴィチの代表作の一つであり、同年にムラヴィンスキー指揮レニングラードフィルで初演された。

大学院在学時に作曲した交響曲第 1 番（1926 年初演）などにより、彼は 30 年代にはすでに世界的名声を博していた。しかし 1932 年に政府が社会主義リアリズムを強く打ち出したことで国内での地位が一変。社会主義賛美の曲を求めていた当時のスターリン独裁と共産党支配下の旧ソヴィエトの体制下で、1936 年 1 月 28 付けのソ連共産党機関紙「プラウダ」紙上で、恋人に献呈したオペラ『ムツェンスク郡のマクベス夫人』（34 年初演）が「音楽というより荒唐無稽」と批判された。それから間もない 2 月 5 日に、同じく「プラウダ」紙上で、バレエ『明るい小川』が「バレエの偽善」と報じられた。

スターリン派か否かで個人が評価されていた当時、このプラウダの評価はソ連での絶対的評価であったため、体制下での彼の立場は非常に危ういものとなった。30 年代は反スターリン派粛清が始まっており、37 年は大粛清の年であった。既に知名度が高かった彼に粛清というかたちはとられなかったが、彼の友人や、その他活動家、芸術家の多くが粛清の対象とされている。このような状況のなかで、既に完成していた交響曲 4 番の初演をキャンセルし、5 番の作曲に取りかかった。5 番が「古典回帰」と言われるのはそのためである。

1937 年 11 月 21 日。ロシア革命（1917 年）の 20 周年の演奏会での初演は大喝采を浴び成功をおさめた。また当局も「社会主義リアリズムに則った傑作」として評価た。西側

では「ショスタコーヴィチの変節」といわれもしたが、苦悩から勝利、歓喜への交響曲として広く聴かれた。

ショスタコーヴィチの死後に出版されたヴォルコフ著『ショスタコーヴィチの証言』によれば、終楽章の歓喜は”強制された歓喜である”とされている。本書の真偽についての論争はあまりに有名なためこの場には記述しないが、この曲の評価を複雑なものにしたことは確かである。

第 1 楽章 Moderato – Allegro non troppo

複雑なソナタ形式。ショスタコーヴィチは後に「この交響曲のフィナーレは、基本テーマに応じて第 1 楽章に課された問いに対する答えである。」と語っている。それを表すかのような重々しい弦の追奏で始まる主要主題Ⅰ。この主題が以後第 1 楽章全体を支配する。続いてヴァイオリンが痛切に主要主題Ⅱを経て、ピアノと弦のピツィカートにのって 4 本のホルンが奏でる不穏な旋律から長く激しい展開部が始まる。小太鼓が打ち鳴らされ金管による行進曲、ついで弦と木管に寄る鬼気迫る序奏部の追奏。再現部では第 1,2 主題が順次現れ序奏がこれに加わる。コーダのヴァイオリン・ソロ、チェレスタによる幻想的な半音階でこの楽章を終える。

第 2 楽章 Allegretto

ショスタコーヴィチが得意とするスケルツォ。荒々しい弦のリズムに乗って木管が道化のように第 1 主題を奏でる。中間部のヴァイオリンとフルートのコミカルなソロから、ファゴットと弦のピツィカートで静かにスケルツォ主部が再現され、コーダでオーボエがトリオの主題を歌いかけたところで 4 小節のトゥッティを以て終える。

第 3 楽章 Largo

弦楽器と木管楽器を中心に叙情的な、室内学的オーケストレーションを持つ。ハープとソロ・フルートによって奏でられる主題は、1 楽章のエコーとしての働きもしている。ロシア正教の鎮魂歌 Panikhida の旋律が全体に見え隠れする。作曲者自身「私は全楽章の中で第 3 楽章に一番満足している。ここで私は全体として切れ目のない動きを与えることに成功した。」と評している。

第 4 楽章 Allegro non troppo

3 楽章の静寂から醒ますように、ティンパニの連打から金管楽器が威圧的な第 1 主題を強奏する。そこからアッチェランドで一気にテンポが速まり、弦によって主要主題の補助的なテーマがあらわれる。第 1 主題が展開を続け、弦と木管の 16 分のパッセージをバックにトランペットが吹く副主題を、次はもう一度弦と木管がユニゾンで繰り返す。一度頂点を迎えた後、ホルンの平和なソロに導かれ中間部が始まり、弦が救いのない悲愴的なテーマを奏でる。瞑想的な弦の主題がハープと共に消え行くなか、ティンパニと小太鼓の行進のリズムが響き、遠くから木管による第 1 主題がよみがえる。終結部で弦と木管の 8 分音符の A（ラ）にのって金管が高らかに吹奏し終わる。作曲はこの絶え間ない A について「Э т о я, я, я.（それは私だ）」と答えている。共産主義抑圧のなかでも己の不屈の精神を表現しようとしたようにも思える。

（文責　竹下　裕也）

■立響と関連団体の演奏会のご案内です。

立響・フェアウェルコンサート

日時：2014 年 2 月 8 日（土）
会場:京都コンサートホール アンサンブルホールムラタ
曲目：ブラームス交響曲第 1 番ハ短調　ほか

マグノリア室内管弦楽団第 6 回定期演奏会

日時：2014 年 2 月 22 日（土） 18:30 開演（18:00 開場）
会場:京都コンサートホール アンサンブルホールムラタ
指揮：藤田和宏
曲目：ベートーヴェン　交響曲第 2 番 ニ長調 Op. 36
ファリャ　『三角帽子』　ベートーヴェン　交響曲第 6 番 ヘ長調 『田園』　Op. 68

立響・第 111 回定期演奏会

日時：2014 年 5 月 16 日（金）
会場：ザ・シンフォニーホール
詳細未定

衣笠交響楽団定期演奏会 -第 22 回京都公演-

日時：2014 年 7 月 26 日（土）
会場：京都コンサートホール大ホール
指揮：伊藤和夫ほか
曲目：ベエロール　歌劇「ザンパ」序曲　サン・サーンス　交響詩「死の舞踏」ドビュッシー　小組曲サン・サーンス　交響曲第 3 番　オルガン付

好・評・連・載

吉田興三郎のレコード棚

ショスタコーヴィチ　交響曲第５番ニ短調　Op47

高校生時代、親をだましてＬＰレコードを買いあさっていました。Ｌ・バーンスタイン指揮ニューヨーク・フィル盤を買い、さっそく家に帰って聴いたのですが、第４楽章でビ、ビ、ビックリ！

大阪ＡＢＣテレビ(今のテレ朝)土曜日の７時半、「部長刑事」のテーマだったのですから。但しテンポは倍ほど遅かったのですが。

第４楽章の指定はアレグロ・ノントロッポですが、これはアンダンテ・マエストーソ。この番組は全国ネットで、関西では大阪ガスの提供で、その堂々とした音楽にいつも感心しておりました。当時(昭和30年代～40年代)は大阪も元気で全国ネットも多かったものです。

久しぶりにこの演奏を聴きましたが、威勢はいいのですが４楽章は早すぎ。また、ムラヴィンスキー／レニングラード・フィルも全体にテンポが速く、イケイケドンドンの凄い演奏です。但し、どんな曲も同じように聴こえるのはトスカニーニと同じ。

僕の一番好きなチェルビダッケですが、残念ながら今回は×。ミュンヘン・フィルとのは海賊盤のせいか、録音状態が悪過ぎます。(多分客席での盗み取り)　スウェーデン放送交響楽団とのライブも録音は良いのですが、ホルンがミスしまくり、他の金管もチョンボしまくりでお薦めできません。只、第３楽章の陰影ある表現は素晴らしい。

推薦盤に困ってしまい、文芸春秋から出ている「クラシックＣＤの名盤」を参考にしたところ、宇野功芳氏以外の二人がハイティンク／ロイヤル・コンセルトヘボー(アムステルダム)を薦めており、偶然に中古屋で手に入れ聴いたところ、素晴らしい演奏でした。

実はハイティンクという指揮者、もともと好きではありません。まず顔が嫌い！　悪徳金融業者もしくはセールスマンみたいで、演奏も平凡&無個性。苦虫を噛み潰したような指揮者Ｋ・ベームと、変態顔ピアニストのＡ・ブレンデルで御三家。しかしながら、この演奏はオーケストラの力も加わってか、細部にまで豊麗な響きが充実しており、今まで聴いた中では一番の演奏です。

最後に４楽章を、誰かあの部長刑事なみの超スローテンポで演奏してくれませんかねえ？

立響もそろそろ、ベルリオーズ、：幻想交響曲、ムソログスキー／ラヴェル編：展覧会の絵(トランペットに自殺者がでるかも？)　それにストラヴィンスキー：ペトルーシュカ、リムスキー・コルサコフのシェエラザード(ゲスト・コンマスが必要かも)等、どうですかねえ。

また、Ｂ級序曲もいかがでしょうか。エロルド：ザンパ、オッフェンバック：天国と地獄、グルック／ワーグナー編：アウリスのイフィゲニーヤ、スッペ：詩人と農夫&軽騎兵、ボワエルディー：バクダッドの太守、等演奏してもらえれば、古いオジサン達は、涙ものですよ！？

吉田興三郎（S46 Tb. 箏演奏家）